

書道家

三重野文緒さん



インタビュー

INTERVIEW

「Artexpo New York」に参加

大分県を拠点に国内外で活動する書道家の三重野文緒さん。8歳から書道の道に入り、社会人になってから、仕事関係の人に勧められ書道パフォーマンスをするようになった。小柄な身体からは想像できないくらいダイナミックな書道パフォーマンスで近年では、シンガポール、パリ、米国など、海外でも活動の場を広げている。

タイムズスクエアで書けたことが一番うれしい

行こう、とすぐ決めた」という。

ニューヨーク滞在中には、セントラルパーク、タイムズスクエア、ワシントンスクエアなど、有名箇所でのグリラパフォーマンスも決行。初めてのニューヨークで、何を見て、感じ、そして変化があったのか、お話を伺った。

◇ ◇ ◇
Q ニューヨーク・マンハッタンの各地でいろいろなパフォーマンスをやってみてどうでしたか。

三重野 日本でやるよりも「殻を破れた」という感じ。日本ではドキドキして変な目で見られたらどうしようという気持ちがあるんですけど、こっちはそういう気持ちもあまり感じずに、堂々とできましたね。

Q 当地ではストリートパフォーマンス



マンハッタン最大の観光地、タイムズスクエアで三重野文緒さんの身長を超えるサイズの大きな紙に「勇氣」の書を書いた。ニューヨーク、4月8日

初のNYで堂々とパフォーマンス

ニューヨークの歓声通じて自信に

Q ニューヨークでのパフォーマンスをして、受け入れられるなっていう感覚はありましたか。

三重野 受け入れられているという感覚もありますし、その場その場で受け入れられる形を模索していかなくちゃいけない。突き通す部分と柔軟にいろいろ実験するっていうことが大切だと感じました。正直、ニューヨークに来て壁に当たった部分もあります。でも、さまざまな場所でもパフォーマンスをする中で「こんな初めて見た」「カッコいい」「美



④にぎわう週末のワシントンスクエアでは、ニューヨークに書道体験してもらおうとセクションも作り、多くの人がその模様を見学した。⑤ニューヨーク、4月13日 ⑥ブルックリンのジャパングレージで書道パフォーマンスをする三重野さん。⑦同、4月12日

マンスする人も大勢いるので、やりやすかったのでは。

三重野 はい。ニューヨークは反応が良くて、気軽に話かけてきてくれる。日本でやる時は感動もしてくるけど、大きい声を出したらいいじゃないじゃないかって。結構、上品に見てくださるので。

しい」などの感想やダイナミックな動きに対する歓声を通してニューヨークカーとの心の距離を縮められたことは自信になりました。

Q パフォーマンスとして一番印象残っているのはどこですか。

三重野 やっぱタイムズスクエアです。(パフォーマンスが)できないかもしれないという不安とか、ものすごく寒いし、風も強いので危ないし、場所を汚すかもしれないリスクもある中で、やらない後悔か、安全を取るかと、迷いながら、荷物を運んでいる時はすごく変な目で見られて。邪魔になっちゃいますし、「何？この人たち」みたいな目で見られていたけど。でも、行っちゃったらもうやりたいというか。始まったら人も集まってきたりして、声をかけてくれたり、写真とかも撮ってくれたりとかして。でも、たとえ誰も見えていなかったとしてもこの場所

で書けたことが一番うれしいっていう気持ちも味わえたのは、自己満足だけじゃなかったです。

Q 結果とか人の目とか気になっ

て躊躇することがあっても、曲が鳴って筆を持った時には自分はこれやりたんだってことになっているように見えますが、実際やっている時は緊張しないのですか。

感じてもらったことを次の作品の材料に

Q ニューヨークに感じてほしいものは何ですか。

三重野 自分が何かを伝えたいというよりも、作品によって違うんですけど、自由に感じてもらったことを聞きたくて。それをまた材料にして次の作品を創っているっていう感じです。

Q 今回ニューヨークの反応で、一番感じたことは何でしょう。

三重野 ここに来て「もっと頑張らなくちゃいけない、考えなくちゃいけない、勉強しなくちゃいけない」という現実を見られたことが、一番良かったと感じました。

Q シンガポールやパリでもパフォーマンスの経験があるとのことですが、それぞれの違いはありましたか。

三重野 米国では結構、派手なもの、ダイナミックなものが受けやすくて。パリはシンプルだったり、シックなものを受けるイメージがあります。シンガポールは割と静かに見てくれて真面目なイメージでした。



Artexpo New York会場で「魂」の書道パフォーマンス後、来場者に写真撮影される三重野さん。⑧ニューヨーク、4月10日

Q 具体的には今後どの国でやりたいとかありますか。

三重野 そこに人がいれば、どこだっていいです。米国に行く時もフランスに行く時も、調べたりとかもするんですけど、大体行った時に想像以上のいろんなものがあるから。景色とか、人との関わりとか、写真とかで調べても分からないことを体験することが多いので。死なない所だったら、どこでも行きたいっていう感覚です。

Q 来てみて改めて思ったニューヨークの印象を教えてください。

三重野 ニューヨークは、一人一人が自分の人生を生きているっていう感じ。アジア人だったら、海外に行ったら差別されるとか言われたりして心配だったこともあったけれど、みんな優しく。あと、日本だったら自分も人目を気にするし、結構、他人のことを見ている人が多いイメージも私にはあって。何かちょっと違うことしたら、「うわー、見て見て」って悪い意味で見たり、笑ったり、写真を撮ったりとかする人もいるけれど。ニューヨークだったら興味なかったらもう見ないし、そういう意地悪な感じと言う場面を一度も見えていないです。いろいろな人がいるから、皆それぞれ自分のことを生きているっていう感じがします。

◇ ◇ ◇
(パフォーマンスの)漢字の意味も、何を書いているかも、ニューヨークには分からないかもしれない。それでも、さまざまな場所でもパフォーマンスをする中で「意味だけではなく、その動きで感じとってこれる」これこそが表現の本質的なところなのかと、感じるものが改めてできたように見えた。今回の来訪での経験は、さらに高みを目指すために、三重野さんにとって「多くの気づきを体感した、よい機会になった」ようだ。今後の活躍に注目したい。

三重野文緒(みえの・ふみお)
「好きなことを極めながら生きる」を信条に書道作品の制作、ライブパフォーマンスを行う。

【ウェブ】www.fumio-shodo.com